

宮崎県市町村・地域づくり団体等協働モデル事業

「手をつなごう！」
異世代間交流プロジェクト
～パート2

一般社団法人 HUG

小林市

事業名：「手をつなごう！！」異世代間交流新体験プロジェクト

1. 【団体の概要】

一般社団法人HUGは、令和3年度と4年度に小林市からの委託を受けて、「放課後児童クラブ（障がい児受入強化推進事業）」2か所の運営を開始した。また、令和4年度からは、同市からの委託により、生活困窮世帯を対象とした学習支援「きそ塾」を、令和5年度には、宮崎県の認可を受け「放課後等デイサービス」の運営をそれぞれ開始した。さらに、令和6年度からは、「不登校等自立支援事業所（認定心理士による相談支援も併設）」を開設し、児童生徒や家庭の様々なニーズに対応できる事業を展開している。

2. 【事業の目的、ねらい】

令和3年度の事業開始以降、「放課後児童クラブ」に通う児童の中にも、精神障害（主に発達障害）と診断された児童が増加してきた。加えて、不登校や行き渋り傾向にある児童生徒を持つ保護者の相談件数も増えており、相談に対応する中で、複数の課題に苦しむ家庭が潜在している現実を知ることとなった。

こうした中で、地域で生活する様々な年齢の方々と、子どもたちや保護者が協働の体験を通じて生まれる「語らい」の中で、埋もれている課題を発見し、「互いに支え合う」気持ちを持って、それぞれの立場から関わる機会を意図的に設けることが重要である。そのためにも、異世代間のつながりが必要不可欠であり、これを実現するために本事業を実施した。

地域の人々の関わりを通して、地域で育った子どもたちは、地域への愛着を深め、成長しても故郷を忘れずに貢献してくれることが期待される。

3. 【活動内容】

事業では、「田植え」、「稲刈り」、「餅つき」という3つの活動を実施した。

これらの活動は、「もち米」の生産・加工という一連の作業を通して、自然への畏敬の念や先人の知恵の素晴らしさを再確認しようとするものである。

また、これらの共同作業を通じて、児童生徒、保護者、地域住民が協力し合うことにより、自然に相談や支援の機会が生まれ、それを基盤に連携の構築を目指した。

以下、活動ごとに具体的な内容を報告する。

活動ごとの実施報告

[1 だろんこ遊びと手植えによる田植え体験]

期 日	令和6年6月15日（土）
時 間	9：00（集合）～11：00（解散）

場 所	細野小学校近くの水田（借地）
内 容	○細野小学校近くの水田を借り、12月予定の「餅つき」に使用する「もち米」の田植えを行なった。 ○現在見られる機械による田植えではなく、田植え紐を用いた手植えの作業を実施した。 ○田植えの前に、水を張った水田で「どろとなじむ」遊びを実施した。
参加者	児童 30名／保護者 15名／地域の協力者 3名、スタッフ 10名、合計 58名
協 力	株式会社松田林業（水田提供）

記録写真

	
田植え（1） 作業説明	田植え（2） どろんこ遊び
	
田植え（3） 手植え作業	田植え（4） どろ落とし

[2 稲刈りの昔（手刈り）と今（コンバイン）体験]

期 日	令和6年11月14日（木）
時 間	9：00（集合）～11：00（解散）
場 所	細野小学校近くの水田（借地）
内 容	○6月に実施した「田植え」で育てた稲を自分たちの手で刈り取ることにより、生産者の苦労や自然の尊さを学んだ。 ○食への関心が高まり、食べ物の好き嫌いが多い子供でもきちんと食べるようにしようという気持ちを抱かせた。 ○コンバインによる「脱穀作業」を身近で見ることにより、機械化された現代の農業を知った。

参加者	児童 16 名／地域の協力者 4 名、スタッフ 6 名、 合計 26 名
協 力	株式会社松田林業（水田提供）
その他	天候不良が続いたため、平日に急遽実施

記録写真

	
稲刈り（１） みのり	稲刈り（２） 刈り方説明
	
稲刈り（３） 作業風景	稲刈り（４） 脱穀（地域の応援）

【3 昔ながらの餅つき体験】

期 日	令和 6 年 12 月 28 日（土）
時 間	10：00（集合）～14：00（解散）
場 所	市内コインルーム駐車場
内 容	<p>○6月に実施した「田植え」及び 11 月に実施した「稲刈り・脱穀」の一連の活動の総決算として、収穫した「もち米」を使った「餅つき」を実施した。</p> <p>○自分たちが育てた「もち米」を、昔ながらの方法で「蒸し、つき」、食べることによって、自然や食に対する感謝の心を育てる一助とした。</p> <p>○親子の協働体験を通して、親子共通の話題を持つことの大切さに気づかせる活動とした。</p>
参加者	児童 25 名／保護者 10 名／地域の協力者 3 名、高校生 3 名、スタッフ 6 名、 合計 47 名
協 力	コインルーム、坂東氏（場所提供）

記録写真

	
餅つき（１） 火起こし	餅つき（２）
	
餅つき（３） 餅丸め	餅つき（４） 実食

4. 【事業の成果、効果】

（１）成果と効果

普段はなかなか経験できない活動であったため、参加者は大人も子どもも積極的に取り組むことができた。特に、田んぼに水が張られた中で、素足で土を踏む感触は、今の子どもたちや保護者にとっても特別な体験であったようである。足裏の感触に慣れると子どもたちは、身体全体で“どろ遊び”を楽しみ、保護者や地域の協力者は笑顔を見せてくれた。

また、協働体験を通じて、地域の子どものと地域の住民との間で意思疎通が図られた。お互いが顔見知りとなり、日常的なあいさつが自然に交わされるようになったことは、現代社会において、地域づくりの第一歩として非常に重要なことであった。

さらに、子どもたちは、インターネットなどを通じて多くの情報を視覚・感覚的に得ている一方で、田植えから収穫までの実際の体験を通じて、その知識を実感として裏付けることができた。今後、このような体験の機会を継続的に提供していくことが重要である。

引き続き、「地域の子どものを地域全体で育てる」ことによって、子どもたちは幼いころから生まれ育ったふるさとへの深い郷土愛を育み、将来的には地域を支える人材へと成長することが期待される。

(2) 課題

これまで2年にわたって行ってきた活動を今後も継続し、より良い地域づくりを目指していくために、以下のような課題を解決する必要がある。

活動の事前周知や活動後の情報提供を、SNSなどを活用して広く発信する工夫が一層求められる。

また、情報発信に加えて、参加者による評価は非常に重要である。そのためには、回を重ねるごとに何かしら内容の工夫と改善に努める必要がある。

さらに、市内の各地区代表者や福祉事業所、企業等との連携ネットワークを構築し、活動実施に向けて人的協力や資金面での支援を含めた協力体制を築いていくほか、高校生が主体的に参加する体制を創るために、高校生が企画立案しやすい環境を整える必要がある。

5. 【まとめ】

本モデル事業で行った体験活動は、意図的に「昔ながらの手法」を取り入れた内容で行った。このアプローチが子どもたちの興味と関心を引き、地域の方々にも、その意図を理解していただいた上で積極的に参加してもらえた。

活動を通して参加者同士が顔見知りとなり、大人は、現代の子どもの考え方や意識を直接感じ取ることができた。また、活動中での何気ない会話から得た情報は、地域で暮らす住民として、今後の地域社会の在り方を考える貴重な機会となった。

一連の活動に参加した子どもや保護者にとって、時間をかけて自分たちの手で育てたものを加工し、自分の口にするという体験は、自然の力の素晴らしさや人間の知恵、そして皆の協力の大切さを実感する機会となり、その気づきは、参加者の言動に如実に表れていた。

現代社会では、新しいものや他と違うものに注目が集まりがちであるが、変わらない価値や目標を持って続けることが大切だと考える。特に、地域づくりにおいては、目的を明確にし、長期間にわたって継続することが重要である。そうすることで、理解してくれる人々の輪が広がり、信頼を築くことができる。このような活動こそが地域を活性化するための鍵だと思われる。

これからもこの体験活動を継続し、活動を通しての「語らい」を促進し、個々の困りごとに地域の様々な立場からどのように関わっていくかを皆で考えていける場所を作りたいと考えている。そして、前述のように「地域の子どもを地域が育てる」という小林市を目指して、地域全体で子どもたちの成長を支え合っていきたい。